

令和3年度、修士課程日本音楽研究専攻では、8名の修士学生および1名の研究留学生在が研究に取り組んでいます(休学中含む)。

令和3年度は3名が修士論文を提出し修了しました。うち1名は、修士論文審査にかかるプレゼンテーション「オンライン伝音セミナー」の講師に挑みました。

## I 2021年度修了生の修士論文題目と要旨 およびオンライン伝音セミナー開催報告

### ■章 又文

近代中国「新音楽」と「新日本音楽」の誕生と展開  
——中国古箏・日本の箏に着目して——

Beginning and Recent Development of Shin-Nihon-Ongaku (New Japanese Music) and Chinese Xīn-yīn-yuè (New Music) : Focus on Chinese Gǔ-zhēng and Japanese Sô (Koto)

近代日中両国の伝統的音楽においては、ほぼ同時に革新活動が始まった。その二つの新しい音楽ジャンルは、西洋音楽の要素を貪欲に摂取し、それまでの音楽の伝統を刷新した。この論文の目的の一つは、中国「新音楽」の箏楽と「新日本音楽」の箏曲において、「前の時代から継承してきた伝統音楽を守る立場」と、「西洋音楽の技法や理論を取り入れ新しい音楽を発展させる立場」とがどのような関係にあったのかを明らかにすることである。本論のもう一つの目的は、「新音楽」・「新日本音楽」がその後の両国の伝統音楽に与えた影響と、こんにちにおける位置づけを明らかにすることである。

本論では、中国「新音楽」と「新日本音楽」誕生期の箏/箏の伝承・創作活動の実態を概観し、そして、「新音楽」「新日本音楽」以後の伝承・創作活動・音楽教育/養成システムの変遷をも概観したうえで、「新

音楽」「新日本音楽」それぞれの代表的作品の楽曲分析をおこなった。そして現在の箏/箏演奏家および一般人を対象として「新音楽」「新日本音楽」に対する意識調査を行った。

「新日本音楽」の宮城道雄作曲「春の海」と、中国「新音楽」の茅沅作曲「瑶族舞曲」古箏独奏版を分析対象としてとりあげた。どちらも現在では、いかにも日本らしい曲、中国民族色濃い曲としてその名が知られているが、楽曲形式、演奏技法、声部構造などあらゆる要素において、西洋音楽・楽器の作曲技法・演奏技法を採り入れていることが明らかになった。また、意識調査では、現代人の大半が、きわめて西洋的要素の濃い「新日本音楽」「新音楽」を、「伝統音楽」と感じている実態が明らかになった。

現代においては、「新日本音楽」「新音楽」以前の伝統音楽よりも、「新日本音楽」「新音楽」以後の音楽は、若者に受け入れられやすい。「新日本音楽」「新音楽」の出現は両国の伝統音楽の方向性を根本から変え、今の若者にとってその「新しい音楽」こそが伝統であり古典である。「新日本音楽」「新音楽」は、日中両国の伝統音楽の命脈を維持することに大きく貢献することとなったが、反面、「新日本音楽」「新音楽」の以前の音楽の衰退を招いたともいえる。

両国それぞれの新たな伝統音楽について横断的に考察した結果、同じ東アジアの、隣国同士において、伝統音楽と西洋音楽受容との折衷あるいは葛藤、という意味では明らかに共通した歴史を有している、といえよう。

### オンライン伝音セミナー第2回

「中国『新音楽』と『新日本音楽』における箏曲の発展」

2022年1月13日公開(12月23日FaceBookにてライブ配信予定であったが通信不具合のため後日YouTube上に録画を公開した)

## 演奏曲目

「六段の調」 箏本手 韋・替手 吳 璋芳

「さくら変奏曲」 箏 1 章・箏 2 孟 祥健

十七絃箏 藤田 神奈子

「春の海」 箏 韋・ヴァイオリン 田久保 友妃

「漁舟唱晩」 古箏 韋

「梅花三弄」 古箏 韋・古琴 孟 祥健

「茉莉花」 古箏 韋

「梁祝」 古箏 韋・ピアノ 成瀬はつみ



(春の海)

## ■孟 祥健

荻生徂徠の楽律の研究——琴律を中心に——

Ogyu Sorai's Thought on Musical Mode: Focus on Music Mode of Guqin

荻生徂徠（本名は物部、修姓は物、字は茂卿、1666-1728）は、江戸時代の儒学者であり、中国古代の礼楽制度を日本で再現するため、礼楽の「楽」を中心に研究と実践を行った。徂徠は中国の「古三代」（夏、商、周の時代）において聖王が作った楽を探求するために、中国古代の楽律を研究し、独自の楽律論（音律と調にかんする論）を提示した。更に、琴の最古の楽譜である『碣石調幽蘭第五』の打譜を行っている。この実践は、徂徠の楽律研究を構成する重要な部分と

なっている。

以上は、先行研究によって周知のこととなっているが、まだ明らかにされていないことも多い。たとえば、徂徠の「歌奏異均」の説は既に多くの研究者によって論述されている、しかしそれは、単なる理論上の学説であるのか、あるいは実践の産物であるのか、未だに明快な結論はくだされてはいない。また、徂徠が『楽律考』にて考証した中国歴代変遷の黄鐘のピッチは、西洋音高に換算するとどうなるのかについても、未だに結論は得られていない。

徂徠の著作である『楽律考』、『楽制篇』、『琴学大意抄』には、中国古代の文献からの引用とともに、徂徠自身による楽律論・琴律論が書かれている。『楽律考』において、徂徠は「周漢の黄鐘（こうしょう）＝日本の黄鐘（おおしき）」という仮説を証明するため、中国歴代の黄鐘の変遷を論述し、「十の証」（10の証拠）を述べている。『楽制篇』においては、中国の古楽の「五調」（清商五調）は日本に伝来し、日本雅楽の五調子となった、さらに、古楽の「五調」は中国で琴に受け継がれ、琴の五調として伝えられてきた、すなわち、「中国の「五調」＝日本雅楽の五調子＝琴五調」という結論に、徂徠は至ったのである。この結論は、『琴学大意抄』における、琴の「歌奏異均」にかんする徂徠の新たな仮説によっても、補強されることになる。

徂徠の説の特徴のひとつは、琴律を中心に自分の学説を構築している点にある。本稿では、三つの文献の具体的な内容を紹介・解説し、徂徠の楽律論・琴律論の独創性を明らかにした。

## ■寶生 紗樹

都をどりの芸態研究——明治大正期を中心に——

A Historical Study of *Miyako-Odori*: Performance in the Meiji and Taisho Era

京都市東山区の祇園甲部歌舞練場では、毎年春に都をどりが上演されており、京都の春の風物詩として知られている。

都をどりは、明治5年第一回京都博覧会の附博覧としてはじまり、以来、今日まで上演が継続している。

本稿では、明治5年の初演から大正15年までの都

をどりの歌詞を調査し翻刻し、明治・大正期の都をどりの歌詞を第一期から第八期に分類した。

結果、初演時は、文明開化に突き進む京都を巧みに歌詞とし、以降、明治期は風物を歌い、古典文学への接近を試み、新年御題を毎年の歌詞に取り込み、大正期になると、宮廷文化の主題化と民俗芸能への取材が行われたことがわかった。

## II 在籍生の研究活動

### ■成瀬 はつみ

令和3年度より、「音楽と美術の学びの夜」という学内のオンラインイベントを主催しました。このイベントは、音楽学部と美術学部（音楽研究科と美術研究科）の学生が専攻を超えて集い、また教員や卒業生にも開かれたような勉強会・交流会です。一年間で5回開催し、学内外から延べ160人もの方々にお集りいただきました。会の中では様々な意見が飛び交い、知見の広がる充実した機会となっています。

また、四胡、ピアノ、箏、古箏によるカルテットである「伝新音カルテット」を結成し、演奏活動を行いました。単に演奏するだけにとどまらず、作曲や編曲、演奏会の企画・運営なども行い、良い経験となりました。コロナ禍で様々な制限があったものの、演奏会にはほぼ満席のお客様に来ていただきました。



© DORIAN NAKAGAWA

### ■藤田 神奈子

実技研修制度を利用し、胡弓のお稽古を受けました。胡弓とは日本で唯一の擦弦楽器で、かつては三曲合奏でも使用されていました。演奏技法や音楽の特徴について知識を得ることが出来た有意義な機会となりました。

また、今年3月13日に行われた「万里の長城杯国際音楽コンクール」に箏で出場し、民族楽器部門大学の部において第4位（第1位、第2位なし）をいただきました。コンクールの出場は約7年ぶりでしたが、このように目に見える形で演奏を評価していただきうれしく思います。箏曲は研究対象でもあるので、演奏面でも研究面でもさらに知見を深めていきたいと思っています。



(© DORIAN NAKAGAWA)

### ■荒野 愛子

昨年度（2020年度）に引き続き能の演奏や作曲の研究を行なっている。

今年度（2021年度）は、宝生流今井基先生の門下生の発表会に参加し、「猩々」と「橋弁慶」を謡った。小鼓のお稽古では、中之舞、男舞、神舞などの舞事を習得した。

また、宝生能楽堂で行われた能『野宮』の公演（主催：真花）に先がけたイベントにおいて、「言葉と音楽の調和 —能《野宮》の作曲技法—」という題でレクチャーを行った。能の舞台上で起こっているさまざまな面をどのように鑑賞し理解したらいいか、音楽の側面から考えることで、鑑賞の一助となるよう、一般の方にわかりやすく説明することを心がけた。

研究の面では、江戸後期に書かれた地拍子の解説書である『洋々集』（建部満寿 文久元年）を藤田隆則先生らとともに、解説、八割譜作成の作業を進めた。能の重要な構成要素である謡がどのように作曲され、またそれらはどのように分類できるのかを検討することで、能の作曲法といえるような一つの方法論が見出されるのではないと思う。



### ■関本 彩子

コロナ禍で、大勢で「うたう」イベントの開催が難

しい一年でした。

昨年度に引き続き、西宮市未来づくりパートナー事業「室町時代のご当地曲～能「西宮」を謡おう！」に参加しました。市内在住の能楽師の指導のもと、マスクや消毒、検温などの感染対策をした上で謡の稽古をするワークショップに参加し、ホールで発表しました。公演では「西宮」が、能楽師により謡で上演され、参加者に現代語訳が配られるなど復曲に向けて、前進しています。

能楽のことを知らない人々にどのように普及させていくかということテーマに体験型のイベントを引き続き探していく予定です。

### Ⅲ グループ活動

#### ◆浜松市楽器博物館見学（2022年2月21日）



(成瀬・阿拉・孟)



(成瀬・寶生・藤田・韋)



(阿拉)



(孟・韋・学芸員石井紗和子氏・関本・藤田隆則・

藤田・成瀬・寶生)

#### ◆伝新音カルテット演奏会（2022年3月22日）

阿拉（四胡）・成瀬（ピアノ）・藤田（日本箏〔十三絃・十七絃〕）・韋（中国古箏）によるカルテットの結

成記念演奏会。

カワイサウンド技術音楽振興財団の音楽振興部門（コラボ部門）助成をうけ開催された。

於 JEUGIA 三条本店 5階 J-Square

演奏曲目（楽器編成）

民歌主題変奏曲（qt）／烏力格尔叙事（ウリゲル叙事、sih & pf）／蘭亭序（güz & sih）／青花磁（güz & pf）／クリスタルムーン（sô）／クロアチアンラブソディ（qt）／陽春（sô, güz & pf）／草原牧歌（sih & pf）／秋によせる3つの幻想曲（第1・第3楽章、sô, güz & pf）／落下的声音（雪の落ちる音、qt）／桜花草（成瀬オリジナル作品、qt）／菊花台（qt）



(© DORIAN NAKAGAWA)



(© DORIAN NAKAGAWA)